ファビオ・アルミリアート

将来の夢は、オテロを歌うことです。僕のようなレパートリーのテノールすべてが願うことでしょうが、僕も例外ではありません。

取材・文=中 東生
Text=Shinobu Naka

久しぶりに会ったアルミリアートは、「こんなこと、今までに一度もなかったのに！」と悔しそうに話してくれた。パルマの《アイーダ》のリハーサルの後、狭い駐車場に車を停めて降り、助手席に水の入った瓶と車の鍵を置いて上着を脱いでいたら、ドアが自動的に閉まって、開かなくってしまったそうだ。そんなドタバタの中、インタヴューは始まった。

●

――11月にデッシーさんとの《アンドレア・シェニエ》の録音があるそうですが、あなたのシェニエの聴きどころは？

アルミリアート（以下、A） 初めて聴いたテノールがジーリで、たまたまジョルダーノの《アンドレア・シェニエ》だったのです。それがオペラに恋に落ちるきっかけとなったので、特に思い入れのある役で、私はこの役を愛しています。シェニエは、歌詞も音楽も、とても詩的に描かれています。それを表現しながら、ジーリの甘さと、教わったこともあるコレッリの強さを統合しているのがぼくのシェニエです。

――役作りの難しさは？

A このオペラはテノールにとって、最も大変なオペラだと思います。少なくとも、ヴェリズモ・オペラの中では。しっかりした低音と、その上に高音も要求されるので、声楽的にも難しく、またオーケストラも厚いですから。現に初演を歌うはずだったテノールは、〝歌うのは不可能〟と降りてしまい、ワーグナー歌いが調を下げて解決したようです。2幕のデュエットは、その中でも特に難しいものです。また、よく知られているアリアの存在も、難しさの1つです。

――これまでの役への取り組み、経験は？

A 思い入れが大きく、実際に歌うまでに時間をかけたので、最初から上手くいきましたが、今までの中で最高のシェニエは、2000年にニースで演じた時でした。それまでに何度も歌って成熟していたところに、ダニエラ・デッシーという素晴らしい共演者に恵まれ、芸術的にお互いを高めることができました。

――作曲を専攻されていたことは、現在のアルミリアートさんにとってどういう点で役に立っていますか？

A 誰にも依存することなく、自立できるところです。作曲家の意図がよりよく読めるので、音楽作りも、役作りも深くでき、別の人が違う解釈を強制してきても、理路整然と反論できるのがいいところでしょうか（笑）。指揮者ともうまくいきやすいと思います。

――弟さんも有名な指揮者であることについては？

A 現在はあまり共演することも多くないが、異なる意見を持ちつつも、公私共によい関係です。

――デッシーさんとは私生活でもよきパートナーであるようですが、プリマドンナと暮らすということは？

A 彼女は歌手としてだけでなく、人間としても素晴らしいので、メリットこそあれ、デメリットはありません。また、レパートリーも共通のものが多いので、旅の多い歌手の人生の難点を、一緒に旅できることで、長所に変えられます。音楽のことをまるっきり話さない日もあるし、僕の娘と彼女の息子が、ちょうど今日、コンセルヴァトーリオに合格したので、家族中で音楽の話をすることもある。

――1986年にデビューしてからこの約20年もの間、昇り続けていかれる秘訣は？

A 音楽に対する愛情と情熱でしょう。

――将来の夢は？

A オテロを歌うことです。僕のようなレパートリーのテノールすべてが願うことでしょうが、僕も例外ではありません。マリオ・デル・モナコ以来、イタリア人の名オテロが出てきていないので、それを目指したいです。

――日本の聴衆にメッセージを！

A 僕は日本が大好きで、日本食も大好物です。日本は文化的、歴史的レヴェルが高く、オペラへの情熱も著しく、聴衆も温かいです。この《アンドレア・シェニエ》が決まった時も、子供たちと一緒に大喜びしました。今までにも97年のメトロポリタン歌劇場来日公演で《カヴァレリア・ルスティカーナ》を歌い、98年にはサントリーホールのホールオペラで《ナブッコ》を歌いました。去年も《蝶々夫人》で来日できたので、これからも定期的に来日して、日本の皆さんに私の声を聴いてもらいたいです。

ファビオ・アルミリアート

［公演情報］
藤原歌劇団《アドリアーナ・ルクヴルール》〈日時〉8月27日15時・29日18時30分〈会場〉東京文化会館〈出演〉ダニエラ・デッシー、ファビオ・アルミリアート、エレーナ・カッシアン、菊池彦典指揮東響ほか〈問合せ〉03・5466・3181　※8月28日は別キャストによる同一公演あり